
名前のない小説 1

中村美紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前のない小説 1

【Nコード】

N4659S

【作者名】

中村美紀

【あらすじ】

愛しい彼を殺した美紀
生き返ったなつめ

この物語は、罪と歪と愛の物語

罪と歪と愛

私は、アナタをに裏切られました。

私はそのシヨックでアナタを殺しました。

それでも、アナタが好きでした。

どうしたら、また会えるの？

ある日、私は変な夢を見た。

それは、私が殺した人が・・・私の名前を呼んだ夢だった。

夜、それで目覚めた私は、喉が渴いて水を飲みに行ったら・・・台所に誰かいました。

『誰？』

「美紀・・・何で殺したの？」

私は、はつきり聞こえた声に驚きました、その声は、私が殺した人の声でした。

でも、暗くて・・・その人が見えません

そして、自分の体に何かさっさてることに気づいたのです。

「なっ・・・！」

私はそのまま倒れ意識うしなしました。

「私は・・・死ぬ・・・の？」

つと口にして・・・。

目が覚めると、見えるのは天井でした、白い天井。
隣には友人の美佐子がいました。

「あ．．．．！美紀！」

大声をだして．．．私を見る。

『私．．．何で．．．ここ何所？』

「ここは、病院．．．美紀が誰かに刺されたのよ！」

私はその時、ふとあのときの出来事がよみがえりました。

（誰かに刺された．．．誰に？もしかして．．．．）

「本当心配したんだから」

『ごめん』

あやまって、翌日私は退院して自分の家にかえってみたら鍵があいてるのに気づいた。

『あれ？．．．．』入ると。

私は、変な違和感をしっただんです。自分の家でも何か緊張してしまっ

リビングに行くと、また、誰かたっているのだ。明かりをつけるとそこには、一人の男の人がたっていた。

私は恐怖のあまりに地面のペタンと座り込む．．．．

『なつめ．．．．』

まさしく私が殺した．．．なつめがたってるいたんだ。

『な．．．なんで．．．いるの？』

恐怖のあまり声がふるえる。

つとゆうのなつめは「おかえり」っという近よって来る。

『いや！・・・こ・・・来ないで！』

といい立ち上がるうとするがビクともしない。

そして、目の前になつめがいた・・・私はびっくりするあまり・・・
・お腹がいたむ。

「美紀、どうして刺したの？」

その声にビクつとして答えようとする

『それは、アナタが裏切ったから・・・。。』

声がふるえる。どうしよう・・・今すぐ逃げたい・・・。

「どうして、俺はうらぎってないよ」

つといい抱きしめた・・・体が動かない・・・誰かたすけて！

「美紀を愛してたのに・・・どうして？」

愛してたつと聞いたら、私は何かに安心感もちねむってしまった。

起きるとソファアの上に横たわっていた。

『はは・・・夢か』

と呟き、起きてみると誰かが料理しているのだ

「あ、起きた^^おはよう」

とつ言い料理をつくっているなつめがいた。

『夢・・・なの・・・？』

たしかに私はなつめを刺したはず・・・なんで！

目を閉じ、またあけるとなつめ本人がいた。

「早く着替えて、朝ごはんにしよう」

「うん……。」

と私はびつくりしながらしたくをする。

部屋で着替えてると、ノックをする音に気がついた

「まだアゝはいつていい？」

なつめが言う

私はカッターをもってドアを開ける……

『アナタは誰？』

カッターをなつめの目の前につきだす。

「俺は、なつめだよ。」

『嘘だ！私はある日なつめえを殺したはず！何で出て来るんだよ！』
大声をだして言う。

「ん？あゝあの時は俺は死んでないよ」

美紀心（はあ？嘘だ！この人嘘ついてる）

「きずの深さが短くてよかった」

そっくり、私のカッターを取りあげる。私はそれを聞いておどろく。
……

美紀心（傷？……短い？）

「俺は死んでない」

といいカッターをポケットにしまう。

『嘘だ……何で……嘘よ……』

私はしゃがみこみ、混乱する。そしてなつめもしゃがんで、抱きしめて。

「俺は美紀の物だからね。だから美紀も俺だけをもとめてくれ」といい私をだっこしてキッチンに連れて行かれた。

罪と歪と愛（後書き）

どうでしょうか、長くてすみません。

漢字間違いがあるだったら、感想のところでかいてくれば・・・
直します。

大学のサークル（前書き）

台所につれていかれた、彼女
彼女の心の中を見たい、彼

続き。

大学のサークル

あの日は俺は刺された

愛する人に刺されてしまった

友人と飲みに行った時、刺された

どうして？・・・ねえ・・・どうして？

「はい、朝ごはんにしよう」

彼は言う。

私は、ちよつとなつめを見ながら食べ物をお口にする。

（まさか、毒とかはいってないよね・・・）

「んう・・・！おいしい！」

私は大声をだしてしまった。

その後、あまりにおなかすいたのでガツガツ食べていた。

なつめは「初めてこんな美紀みた」っという食べている。

それはそうだ、私はやさしいおとなしい女の子の仮面をつけてたもん・・・。

「おいしい？」

彼が言う。

『うん^^すごいね・・・どうやったらこうなるのかな』

（また、私は仮面を付けたほうがいいのか？）

「ねえ、それが・・・本来の自分のなのか？」

それを聴いた瞬間、どう答えがいいのかわからず・・・食べるのをやめる。

『うん、そう私は・・・あなたに仮面をつけて・・・つきあってたの
本当のことを言う。』

『これでも好き?』

聞く私は不安のきもちでいっぱいだった。

彼はすぐに答えた。

「好きだよ、逆にもつと知れた気がする。」

といい食べるのを再開。私はその言葉に、感動をして泣きながら・・・
・食べるのを再開。

彼は、クスクスと笑い、涙を拭いていた・・・

そして7時30私たちはそれぞれの仕事と学校にいった。

学校は相変わらずだった大学1年生なのに、とてもまだ高校生でいたかったと思う気持ちでいっぱいだった。

私となうめがあったのは、高校3年で新しい先生で紹介された時だった。私は全然興味なかったけど、
その、人気さなにうんざりしてた。

ある日先生に呼ばれて、「付き合おう」と言われた。その時私は、
断ったんだけど・・・

先生のアプローチが強すぎて付き合うことになった。

それから、初デート、初キスまでいった。

でも、ある日から、彼から電話で「ごめん、今日は帰れないや・・・
」ぶちつと切れた。

それから、私たちはあんまり会わなくなった・・・学校でも急がしそうで他の若い先生とたのしそうに話したところを、見てしまった私は。あの日、なつめを刺してしまった。

あの時は、怯えて・・・すぐにはしつて逃げた。

そして翌日のニュースでは普通にでる、自分の名前がないことに築いた。その翌日も1週間¹

年・・・私の名前でなかった。

先生のことも忘れたころ・・・あの日また、あった。

今大学のサークルをなににしようか・・・迷つてるところだ。

いろいろあつて、お笑いサークルやホラーサークルや数学サークルとかとか・・・

『はあゝ私にはいいものないかな・・・』

口にした瞬間、後ろに声がした

「俺も、どうしようかなあゝ」

謎の彼が言う

『え？・・・君もまよつてるの』

振り返る

「ああ、そうだけど・・・あんまりいいものないなあゝ」

彼はこまつた顔で言う

『そうだよな、あ・・・恐怖サークル？』

ふと目にはいったものだった。

「ん？・・・何だこれ・・・何か面白そう・・・だけど、ルールあ

るみたいだぞ」

彼が言う

『ん？』

そこには、こう書かれてた。

<ルール>

このサークル、恐怖話や殺人を興味がある人だけ来てもよしとする。

『殺人って・・・うゝん、これにしようかな・・・。』

「え！？、そこに入るの？」彼がダメと聞いたそうな顔になる

『そう^^；・・・でも、面白そうだから・・・んじゃ、見学してくる』

わたしはしつて行く

「おい！・・・いつちゃったよ」

そして彼はどっかいった。

そして、私は恐怖サークルにはいった。

大学のサークル（後書き）

漢字間違い、あったら感想の方へお願いします！

彼のやきむち？自分の誕生日（前書き）

なつめ
彼は生きてる。

新たな友達ができた彼女（美紀）

彼のやきむち？自分の誕生日

7：00 晩ご飯に

「なあ美紀、サークルきまったか？」となつめがいいだす。

「今日きまったよ、恐怖サークルって名前のサークル」

言うとなつめはびっくりした顔でこっちを見る。

それを見て、私は……

『いいじゃん、別にあと友人といっしょだし』と言うとすぐに、質問がきた。

「友人って男か？それとも女か？」とちよつと不機嫌そうに言う。

『ど……どうしたの？えーと、男だけど』とちよつと小声でいった

するとまた質問がきた。

「名前は？」と言う

（ちよつと、どうしたの？もしかして、やきむち？なーんて。そんなこと、あるわけない。ちよつと意地悪しようかな、もしやきむちだったら……）

『レンって言うだあ』

私は、微笑みながら言った。

そうあの時、レンと一緒に入ったのだ。

私のはしっていった後でちよつと心配になり、追いかけたのだ。

彼は

「ふん」といい微笑む

『どうしたの？・・・変だよ？』と言うと。答えがすぐにかえってきた。

「うん、大学の先生でもなろうかな？てね」と言い出した。

私はその言葉にちょっとびつくりした。

（え？どうゆうこと・・・本当にやきむちしてるの？）

その時顔が赤くなってることに気づいた。そして、なつめの顔を見た。

そしてらちよつと不機嫌で、頬が膨らんでいて、ちよつと子供みたに見えた。

『なつめ？大丈夫？』つとゆくと、こっちを見て

「んま、大丈夫だけど・・・何か気に入らなくて」といい皿を台所にもっていった。

私はちよつと笑ってしまった。だって、あんな・・・なつめ初めて見たからだ。

翌日

私は久しぶりにいっぱい勉強した。そのためか今頭がぱんぱんである。

すると・・・

「よお！美紀^^」つとレンが私の元へ来ていきなり、「なあ、今

日合コンいかねえ？」っといいだした。

私はきっぱり断った。そしたら、「えゝ何でゝ」と子供ばく言う『しょうがないでしょ、意味ないんだから……』とゆうと美佐子が近づいてきた。

「そうそう、私がいつてもいいけど。」っとゆうと「え！いいの！んじゃ来て！って何で、美紀は無理なの？」と聞いてくる。

本当は私も行けるんだけどなつめが出てきて……。とはいえない。そしたら、美佐子が「彼氏ができたのよお！」っと言った。

「そうよ」っと私は小声でいった。そしたらレンがなつとくし美佐子に紙を渡し、どこかへ行ってしまった。そして、美佐子が質問してきた。

「どうゆうこと……本当に新しい彼氏ができたの？」と言い出す。私は美佐子に全部話した……。刺されたあとの話をそしたら「何それん、んじゃ……。死んでなかったってこと」と言う、『そうなの』と私は言う。

美佐子と私は大親友と呼ぶ間である。あの日もいっしょにいてくれて見たもの……。「そんな、あれはふかったわよ」っと言う。あの日なつめと浮気相手といっしょに帰っていたことを見て私たちは、プランをねり、実行した。

(でも……。なぜ?)

その時うしろから美紀ゝと呼ぶ声がした。振り返ると、なつめがいた。

「うそ……。でしょ……。」といいびつくりしてる美佐子を見た。「あ、なつめ……。」と声を口から出る「迎えに来たぞ」っと微笑むみながら言う。「お……。ひさしぶりです……。先生……。」と美佐子の声が震える。そしたらなつめは「ひさしぶ

りだなあゝ美佐子さん。」と微笑む。

美佐子はまっさおの顔でその場に立ち去った。『あ！美佐子！？』と私は言う。

あんな反応は当たり前だ……。友人が刺した人がまだ目の前にいるんだもん。するとなつめが「ねえ、帰ろう」といいだす私は『え？』といってひっぱられれ車の中に。

家に帰ると、人がいっぱいいる。

え？どうゆうこと？・・・あ！そうだ！私はすっかり忘れていた。

私の誕生日だ

「ミキちゃん誕生日おめでとぅー！」と大声で皆言う。私は、ありがとうといいながら入る。昔の友達や先生、今のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃんと隣の人。私は、初めてでどうすればいいかわからなかった。

18歳になったのだ。

彼のやきむち？自分の誕生日（後書き）

漢字間違い、感想があったら、きらくに感想の欄にかいていってください。

最終回（前書き）

2人の愛の結末は・・・。

最終回

そして、その翌日・・・私のベットにプレゼントの山だった。
それに、うれしくて全部あけて見た

いろいろはいつていて、花、ゲーム機、服、家庭用品あと・・・指輪だった。

指輪の送り主がなつめだった・・・それはブルーサファイアの指輪だった。

『え・・・ど・・・どうゆうこと?』と口にすると後ろから声がした・・・。

「どうゆう意味だと思う」と、後ろから抱きしめてまた、『ちよつとまって・・・。』と私はとまどう

『プレゼントとしてはありがとうだけど・・・。私はアナタとはけっこんはお断りよ』とはつきりいった。

だってアナタは浮気をしたもの・・・。すると、なつめが強く抱きしめてきてこう言った。「嫌だ!!なんで、どうしてだよ!!!!理由を教えてよ!!!!!!」といつてきて、私はきっぱりいった。『アナタは、私をうらぎったからでしょ、ちよつと放してよ!』と大声で言う。

「どんな裏切り?教えるよ」と声がかわって言う。放してくれない。はあ?覚えてないの・・・?あくゆつてあげるわよ!『それは、アナタが浮気したからでしょ!放せ!』

「そ・・・そうだったのか?」つと力がよわまる。『そうよ、そしてあの日アナタを刺したのよ!なのに・・・なんでもどつてきたのよ!!!』と言う、その時点でもう私は泣いていた。なつめは愕然

としていた。あたりまえよね……。でもすぐに微笑みこういった。

「でも、もう大丈夫……。俺美紀しか見てないから……。もう。」
といいまた抱きついてきた。そして私は力尽き倒れた。起きたら、隣にはなつめがいて「大丈夫？」って聞いてきた。私は、微笑んでこういった。『大丈夫』って……。

そしてけっこんして……。しやわせに暮らしたのであった……。だが、その3年後そこに家族は崩壊により皆死んでしまったのであった。

なつめのいたいはまだみつかっていないそうです。

どうもー初めましてこの小説を書いた『中村美紀』といいます。これを書いたときは中2の後半でした。

ある日、ペンと紙をもっていたら……。勝手にこのストーリーを書いていました。私にもなぞなんですけどね……。

それでは、これは置いといて……。今私が書いている小説をここで近日公開します。それもまだ完結してないんだけどね。

それでは皆様、近い日に会いましょう♪
バイバイゆ~~~~~！

最終回（後書き）

漢字間違いがあれば・・・感想のほうへお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4659s/>

名前のない小説 1

2011年10月9日00時38分発行